



6月 ちとせだより

子どもたちは、幼稚園の様子をどんな風にお家の方々に伝えているのでしょうか。「～して遊んで楽しかった」「～ちゃんと遊んだよ」等と子どもから聞くこともあるかも知れません。子ども自身が伝えたいという気持ちがあふれての言葉でしょう。しかしある子どもにとっては、幼稚園は親の関与がないからこそ楽しいのであって、その世界を親に伝えることは、「自分の世界に入ってもらえる」「親に何か言われる」のではないかと思って、「言いたくない」気持ちを持ったり、また聞かれた時にもそう発言したりするかも知れません。子どもの全てを知りたいと願う親は、子どもの行動だけではなく、子どもの気持ちも知りたいわけですから、根掘り葉掘り、子どもは言いたくないことまでも聞こうとしているのだと思います。そんな時、親に言いたくないことを問われたとしても、子ども自身も本当のことは言いつらく、ついつい親の望むように答えて、結果的には嘘をついてしまうことにもなりかねません。また、親は自分が望む子どもの姿にわが子を近づけようとして様々な指示を出したり、その願いを子どもに伝えたりしがちです。しかし、子どもには親に言われてそれに従うのではなく、「自分で考えてほしい」「親に言われたようにはしたくない」という願望があるので、ある時には親の言うことにあえて逆らうことになったりもします。親が言わなければ、そうしていたことも、言ったがばかりに逆のものをあえて選ぶこともあるのです。このように、親の子どもに対する期待は往々にして裏切られるもので、また親に反発して子どもが選ぶ将来の様々な選択も、子ども自身が本当に願って選んだかというとなかなか難しいものです。

昔から「子どもの喧嘩に親が口出しするな」とも言われるように、特に幼稚園という「先生はいるが親の関与がない環境」では、子ども自身が自分たちの力で課題を解決していくことが出来る最も適した環境なのです。そして、その子ども同士の解決は、決して大人（親）の価値観にあった解決ではないかも知れませんが、子ども同士は子どもの世界の価値観で解決し納得し合うのです。特に幼児期の子どもの喧嘩は、子ども同士の興味や関心が似通っているから生じるもので、たとえどちらかが、また両者が泣いてしまったからといって、その後の二人の関係が悪くなるわけではありません。さっき喧嘩した二人が、泣き止んでまた一緒に遊んでいる姿は当たり前なのです。

親が学校の先生のように、「こうすれば、こうなる」と、公式のようにわが子に生き方を教えることが子育てではありません。子ども自身が様々な人生の選択をしていくことが出来る力を培っていくことを、見守り支えていくことこそが、親の務めであることを忘れないでほしいものです。

年主題 「あふれる愛」

6月主題 「動き出す」

聖句 “イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。”

(ルカによる福音書2章52節)